（日本語教育 142 号　2009.7）　〔研究論文〕

推量の「でしょう」に関する一考察
――日本語教育文法の視点から――

庵　功　雄

要　旨

「でしょう（だろう）」には推量と確認の２つの用法がある。しかし，実際の発話データを分析した結果では確認が多数派である。特に，推量の「でしょう」の言い切りの用法は極めて少ない。「でしょう」で言い切ることができるのは発話者が「専門家」である場合（天気予報はその典型である）など一部の場合に限られる。にもかかわらず，日本語教科書では推量の「でしょう」（言い切り）は必ず導入されている。これは「体系」を重視する日本語学的発想によるものであり，「日本語学的文法から独立した」日本語教育文法という立場からは否定されるべきものである。本稿では発話データと日本語教科書の分析を通して，「でしょう」の実相を明らかにし，それに基づいて「でしょう（及び「だろう」）」の導入の順序について論じる。本稿は白川（2005）らが主張する日本語教育文法の内実を豊かにすることを目指すものである。

【キーワード】　「でしょう」，推量用法，使用実態，日本語教科書，日本語教育文法

0．はじめに

文法研究の目的は様々であり得る。例えば，生成文法の目的の一つはヒトの頭の中で文法がどのように内在化しているかを明らかにすることであり，参照文法（e.g. 日本語記述文法研究会編の一連の著作）の目的は広範な言語事実の提示にある。

このような観点から見た場合，「日本語教育のための文法（日本語教育文法）」というものも措定されてしかるべきである。ただし，このときの文法は「日本語学的文法から独立した」（白川 2005）ものでなければならない。本稿の目的は「推量の「でしょう」」を題材にこうした日本語教育文法というものが措定可能であることを示すことにある。

1．問題のありか

初級日本語教科書において，「だろう（でしょう）」と「と思う（と思います）」は概言を表す基本的な形式として必ず導入されている（後掲の（表２）参照）。また，「だろう」と「と思う」は類義表現として捉えられている（e.g. 庵・高梨・中西・山田 2000）。こうしたことから学習者が「でしょう」と「と思います」は同じものと考えても不思議ではない。これが「から」と「ので」のように（接続の違いなどの違いはあるにせよ）重要な違いがなければそれで問題はない。しかし，「でしょう」と「と思います」には重要な違いがあると考えられる。次例を考えていただきたい。

(1)　教師：田中君どこにいるか知らない？
　　学生：??図書館<u>でしょう</u>。

これは論者が実際に体験した例であるが，この学生の答えは奇妙に聞こえる。一方，同じ場面でも「と思います」なら問題はない。

(2) 教師：田中君どこにいるか知らない？

学生：図書館だと思います。

同様の例をもう1例挙げる。

(3) メールありがとうございました。書類，確かに受け取りました。問題ないと思います（??でしょう）。ありがとうございました。

(3)は論者が書いたメール文で，書類を送ってもらったことへの返礼のためのものであるが，この例の「と思います」を「でしょう」に置き換えることはできない。

(1)〜(3)のような問題について考えるためには，日本語学的な体系重視の考え方を捨てて実用的な観点から考える必要がある。本稿では，実際の発話データと日本語教科書の例文の観察を通して，推量用法の「でしょう」の使用実態を明らかにし，それをもとにこの問題についての私見を述べたい。なお，本稿では初級の日本語教育を対象とするので，普通体は考察対象としない。従って，基本的に「でしょう」のみを分析対象とする。

2．使用実態

本節では「でしょう」の使用実態を見る。資料は現代日本語研究会編の『女性のことば・職場編』『男性のことば・職場編』（データは現代日本語研究会編（2002）所収のもの）で，発話データ数は，『女性編』が11421，『男性編』が11099で，合計22620である。

まず，使用実態を具体的に見る。

表1 「でしょう」の推量用法と確認用法

(推量)	φ	ね	けど	よ	から・ので	か（ね）(1)	その他	小計
でしょう	5	37	6	0	1	45	0	94
思います	74	5	21	12	20	1	5	138

(確認)	φ	ね	でしょ(2)	小計	総計
でしょう	34	2	282	318	412
思います	−	−	−	−	−

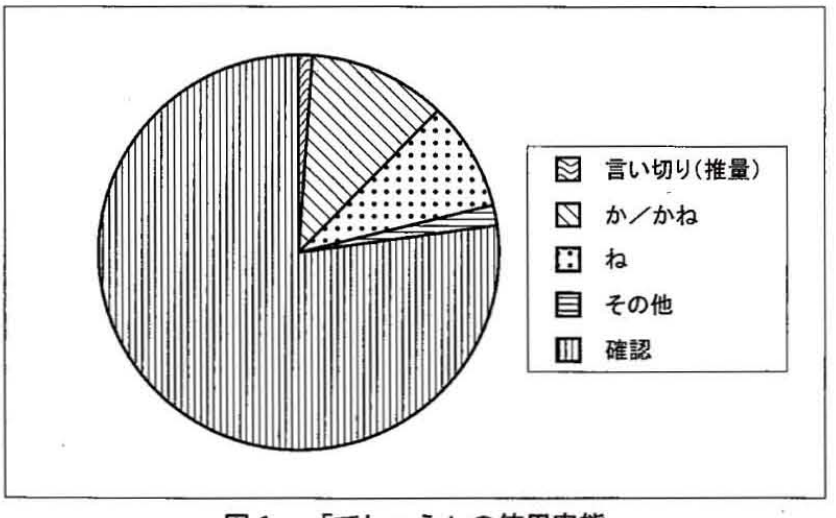

図1 「でしょう」の使用実態

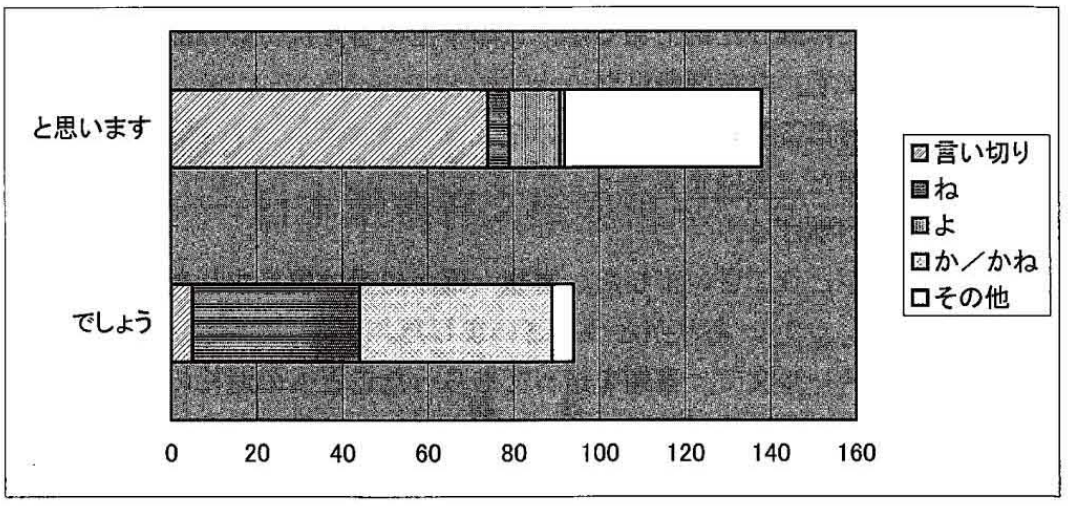

図２　「でしょう（推量）」と「と思います」の使用実態

（図１）から話しことばにおける「でしょう」の中心用法が「確認」[3]であることがわかる。特に，「でしょう」で言い切る例が非常に少ないことが注目される（この点については既に安達（1997）に指摘がある。後述）。「でしょう」で言い切る例自体はそれなりにあるが，その大部分は(4)のような確認用法である[4]。

(4)　ね，サッカーって全部，い，１シュート（いっしゅーと）で１点でしょう。バスケみたいにさあ，★変わんないよねえ。（女性 8003[5]）

一方，今回の資料で推量用法と見なしたのは次のようなもの（全５例）である。

(5)　A：＃＃＃が完成すればエスカレーターができるかもしれないですけど。
　　B：ええー，そのエスカレーターがいつできるかなと思っているんですけどー，はい。
　　A：少なくとも上（のぼ）りが完成するまではできないでしょう。
　　B：それはだめだと思います，はい。（女性 3343）

(6)　A：はかせ，博士号（はかせごう）取ったんだよね，結局。
　　B：すごーい。
　　A：でもー，国に帰ったら★＃＃＃＃＃＃。
　　B：→仕事ねえんだって。←<笑い>
　　A：でも仕事ないっつったな，最初。
　　B：見つかったのかな，仕事。
　　A：あそこは，お金持ちだから，だいじょうぶでしょう。（女性 6286）

３．日本語教科書における扱い

このように，実際の発話では「でしょう」が言い切りで使われる例は非常に少ないが，日本語教科書ではどのように扱われているのであろうか。このことを見るために，庵・高梨・中西・山田（2000）の付録で取り上げられている５つの教科書に Situational Functional Japanese（SFJ）を加えた６つの教科書の「でしょう」に関連する表現の用例を次に掲げる（一部略）。

<みんな>

L.32　・明日は雪が降るでしょう。

・日本の経済はどうなるでしょうか。

——そうですね。まだしばらくよくならないでしょう。

・オリンピックは成功するでしょうか。

——大丈夫でしょう。ずいぶんまえから準備していますから。

L.21　・７月に京都でお祭りがあるでしょう？——ええ，あります。

・あしたパーティーに来るでしょう？

<新文化>

L.17　・沖縄，九州地方は雨でしょう。

・新宿に広くて安いアパートはあるでしょうか。

——たぶんないだろうと思いますよ。

<学友会>

L.11　・明日は（たぶん）雨が降るでしょう。

・今日は日曜日ですから，あの公園は（たぶん）にぎやかでしょう。

・チンさんのお父さんは（たぶん）五十歳ぐらいでしょう。

・明日は（たぶん）雨が降るだろうと思います。

L.12　・あの人はチンさんでしょう。——ええ，チンさんです。

<初歩>

L.10　・あしたはいい天気でしょうか。

——いいえ，あしたはいい天気ではないでしょう。

<東外大>

L.9　・小林さんはあしたたぶんじゅぎょうを休むでしょう。

・その映画はたぶんつまらないでしょう。

L.17　・日本語はむずかしいでしょう。（あなたもそう思いませんか）

<ＳＦＪ>

L.19　・あしたは雨でしょう。

・松見公園はどこでしょうか。

・疲れたでしょう。

・あしたは雨だろうと思います。

これを見ると，例文が天候に関するものに偏っていることがわかる[6]。これが教科書編集者による意図的なものかはわからないが，「でしょう」が言い切りで使われる例としてまず思い浮かぶのが「天気予報」であることは確かであろう（<新文化>はそのものずばりの「天気予報」に１課を割いている）。

4．先行研究

本稿で問題とする「でしょう（だろう）」に関する先行研究には田部井（1990），姫野（1999），安達（1997）がある。

田部井（1990）ではシナリオの用例をもとに，話しことばでは「だろう」が推量用法で

使われることが少ないことが報告されている。その上で，使用数の多い，林（1960）の言う「伝達」に属する「だろう」（押しつけ，念押し，質問）を中心に，様々な用法を初級から小出しにしていき，中上級でまとめるように提示するのが望ましいと述べられている。

一方，姫野（1999）は日本語教師が推量の「でしょう」に関して気をつけるべき点をいくつか指摘している。例えば，「でしょう」を未来を表すテンス形式だと誤解させないことの重要性や，推量の余地がないことには「でしょう」が使えないことが指摘されている。例文は次の通りである。

(7) T：きのうは日曜日でした。きょうは月曜日です。あしたは？
　　L：??あしたは火曜日でしょう。

また，推量の「でしょう」には人称制限があり，1，2人称の主語の文には使えないことが指摘されている（(8)(9)は姫野(1999)より）。

(8) *私は今年の夏休みに国に帰るでしょう。

(9) *あなたは9時に来るでしょう。

そして，この制約を破って「でしょう」を使うと「予言者」の発話のようになることを指摘している。

最後に，安達（1997）を取り上げる。

「でしょう（だろう）」が言い切りでは使いにくいことは既に安達（1997）で指摘されている。安達（1997）によれば，「だろう」による言い切りは，「不確かな事態であるにも関わらず，話し手が一方的に強い主張を行っているといったニュアンス」を帯びるため，「不安定」であり，「ね」を後接させるか「と思う」の補文に埋め込む必要があるとされる。

今回の発話例から「でしょうね」の例を挙げる（今回の発話データには「だろうと思います」が文末で用いられた例はなかった）[7]。

(10) A：あー，山手線，池袋からー，五反田っていうと，新宿通って渋谷通ってですから，もうたいへん。
　　B：池袋乗り換えですからねー。
　　A：池袋もすごいんでしょうねー。
　　B：＜笑いながら＞すごいですねー，えー。（男性 6344）

(11) A：うん。あれはねー，プラント台車なんだよー。よくよく考えてみるとー。あの上で吹き付けなんかしたらもー，どうしようもないもんな，考えてみたらね↑ま，こうゆう問題が起きてから，あとでみんなごちょごちょゆうだけの話だけどさー，そんなら最初からゆっといてくれ，なんてこーゆわれるかもしらんけどー。＜間　3秒＞
　　B：ある程度分けちゃったのが，問題あるんでしょうね↑（男性 2206）

これらの例から考えると，「でしょうね」は話し相手の主張を受け入れてそれに共感を示すという機能を持っているものと見られる[8]。これは次のような相づち的な用法に典型的に現れている。

(12) A：＜笑いながら＞もう，なん百回もあったんですよ，★そうゆうことが。＜笑い＞
　　B：→そうでしょうねー。←（女性 8513）

5．現象の考察

ここでは２つの観点から現象の考察を行う。

5-1　どんな場合なら使えるか

(1)や（図１）（図２）から明らかなように，「でしょう」は言い切りでは使いにくい。ここではどのような場合に「でしょう」による言い切りが可能になるかを考えるが，これについても安達（1997）に指摘がある。安達（1997）は「だろう」による言い切りが可能になる場合として次の２つの場合を挙げている。

１）自分の述べる意見や情報が聞き手にとっても受け入れやすいと考えられる場合

２）相手に対する配慮を犠牲にしてでも，強く主張するということを意図する場合

それぞれの例は次の(13)(14)である（いずれも安達（1997）より）。

(13)　K：変にカラヤンがインターナショナル化してしまいましたからね。
　　A：もう立ち直らないでしょう。ひとりひとりは名のあるプレーヤーがいるんですが…。　（朝比奈隆「ブルックナー交響曲選集のライナーノーツ」）

(14)　巻子「お父さんでもつきあいがあるのかな」
　　綱子「そりゃあるでしょ。男は，つきあいしなくなったらおしまいよ。学校の友達だって，まだぴんぴんしてるだろうしさ」
　　（向田邦子「阿修羅のごとく」）

安達（1997）の指摘は基本的に正しいと考えられるが，１）２）以外に，

３）発話者が「専門家」である場合

というのが挙げられるように思われる。天気予報はまさにそうだが，そのほかに(15)のような例も考えられる[9]。

(15)　A：総選挙の結果はどうなるんでしょうか。
　　B：民主党が勝つでしょう。

この例のBは政治評論家などの政治の専門家であると想像されるが，そういう「専門家」が自分に求められた答えを述べる際には聞き手への配慮をする必要性が減るため「でしょう（だろう）」で言い切ってもよくなると考えられる[10]。

ここで，１）２）と比較した３）の特徴としては，３）においては「でしょう」が（専門家としての知識等に基づく）「客観的な情報を示す」（庵・高梨・中西・山田 2000）という意味で積極的な機能を担っているということが挙げられる。実際，(3)の典型例である）天気予報では「と思います」はほとんど使われない。

以上の点を踏まえて先に挙げた教科書の例文を見ると，＜みんな＞の例文が(15)と同じタイプのものであることがわかる（(16)(17)は再掲）。

(16)　A：日本の経済はどうなるでしょうか。
　　B：そうですね。まだしばらくよくならないでしょう。

(17)　A：オリンピックは成功するでしょうか。
　　B：大丈夫でしょう。ずいぶんまえから準備していますから。

この(16)(17)は３）の条件を満たしている。例えば，(17)でAがBに質問しているのはBがその質問に答えられる資格を持っている（例えば，「オリンピック評論家」）と見なしている

からであり，そのためその答えでは言い切りが可能になっている[11]。

このように，「でしょう」で言い切れるのは非常に限られた場合だけである。しかも，それ（e.g. 3）は学習者が通常立つことがない立場である。学習者の発話が逸脱したものになりがちなのはこうした状況の特殊性が理解されていないためだと考えられる[12]。

5-2 なぜ「でしょう」は教科書で使われているのか

以上見てきたように，「(推量の）でしょう」は（特に言い切りでは）使用例が少ない。では，初級教科書における「でしょう」の取り上げられ方はどうだろうか。「でしょう」の取り上げられ方を「と思います」と合わせて示すと次のようになる（数字は課の番号)。

表2 「でしょう」と「と思います」の初出課

	みんな	新文化	学友会	初歩	東外大	ＳＦＪ
と思います	21	13	7	19・28	12	11
でしょう（推量）	32	17	11	10	9	19
でしょうか	32	17	*	10	*	19
でしょう（確認）	21	*	12	*	17	19

前掲の（表1）で見たように，「でしょう」の用法としては「確認」が多数派である。しかし，（表2）からわかるように，日本語教科書では「推量」の方が「確認」よりも重視されている。このように，日本語教科書で「(推量の）でしょう」が使われ続けている背景には野田（2005）の言う「体系主義の悪影響」があると考えられる。ここで言う「体系」とは形態的には「でしょう」と「だろう」の対立，意味的には「推量」と「確認」の対立である。これらは日本語教育的には分離して考えるべきものだが，「だろう」が（主に書きことばや独話で）「推量」を表すために，「推量」の「でしょう」も「自動的に」導入してしまうのである。ここには，話しことばと書きことばにおける使用実態の違いといったことに対する教科書編集者の無頓着さが見て取れる。さらには，文法は初級で終わりというパラダイムがあることも理由の一つであろう（cf. 庵 2005，白川 2005)。

6．望ましい導入の仕方－日本語教育文法の観点から－

以上の議論を踏まえ，「でしょう／だろう」（ここでは推量，確認を含む）の導入の仕方を考えるが，その前に，理解レベルと産出レベルの区別について述べておきたい。

文法項目の中には，聞いて理解できればいいものと使えるようになる必要があるものがある（cf. 庵 2006)。例えば，「たりとも」という形式は現行の日本語能力試験1級の項目だが，これが産出する必要のない形式であることは明らかである。なお，下位のレベルでは理解レベルであるものが上位のレベルでは産出レベルになるということもあり得る。現行の初級教育では全ての項目が産出レベルであると見なされていると考えられる。これに対して，地域日本語教育における「初級」の意味を論じた庵(2009)では初級後半(庵(2009)の用語で言う Step2 レベル）の文法項目には理解レベルものも含まれるとしている。例えば，「～たほうがいいです」という形式を学習者が産出できる必要はなく，「～たほうがいいですよ」と言われたときにどう反応すればいいかがわかれば十分であるというように，である。こうした庵（2009）の議論に基づいて考えるならば，全ての項目を産出レベルと見なす現行の初級の文法シラバスには再考の余地があると考えられるが，ここでは現行の

文法シラバスの方法論を認めることを前提に考える。

そうした場合，推量の「でしょう」は初級で導入すべきではない。理由は前述の通りで，まず，「推量」は「でしょう」全体の中で頻度が低いということがある。しかも，言い切りにはさらに複雑な制約がかかる。さらに，推量の「でしょう」はほぼ確実に「と思います」で置き換えが可能である（「と思います」は言い切りでも使用可能であり，「よ」との共起も可能であるというように，使用上の制約がない）。以上のことから，推量の「でしょう」を初級で導入する必要はないと考えられる。必要がないだけではなく，(1)のような誤用を防ぐという観点から導入すべきではないと考える。

確かに，日本語学的観点から見れば，「でしょう（だろう）」の基本的用法は「推量」であり，「確認」は派生であると見られるかもしれない（cf. 三宅 1993）。しかし，「日本語学的文法から独立した日本語教育文法」（白川 2005）という立場からすれば，そうした体系性は日本語教育文法とは無縁のものということになる。論者はこの点において白川(2005)と考えを同じくするものである。実際，推量の「でしょう」を導入しないことによって「穴」は生じないと考えられる。

一方，「でしょうか」は「丁寧な質問文」として初級後半から導入する（今回調査対象とした教科書でも＜学友会＞と＜東外大＞以外は「でしょうか」を扱っている）[13]。この際，「でしょうか」を「でしょう」と「か」に分離せず（そうしてしまうと「でしょう」に触れざるを得なくなるので），「でしょうか」という「かたまり（chunk）」として導入することが望ましい。

「だろうと思います」は初級で導入してもよいが，本稿では中級以降に導入するという立場をとりたい。理由は普通形で推量を表す「だろう」は中級以降にまとめて導入した方がよいと考えるからである。

また，確認要求の「でしょ（う）」も中級から導入する方がよいと考える。理由は，本稿の立場では，初級で推量の「でしょう」を導入せず，「でしょうか」をかたまりとして導入するだけなので，確認要求の「でしょ（う）」を導入すると，（「でしょうか」＝「でしょう」＋「か」と分析してしまい）学習者が混乱するおそれがあるためである。

「でしょうね」も相対的に使用頻度が高いが，これも中級から導入するということでいいのではないかと思われる。理由は「でしょうね」を使いこなすためには「ね」に関する知識が必要であるということである。しかし，実際には「ね」や「よ」などの終助詞は初級では正面切って教えられていない。そうだとすれば，「でしょうね」だけを初級で扱うのは無理があると考えられる。

最後に，次の(18)のような「だろう」の推量用法は中級で書きことばに出てきた段階で扱うのがよい。つまり，「でしょう」の推量用法には触れないでおくということである。

(18) 深い闇のなかから遠い小さな光を眺めるほど感傷的なものはないだろう。

（高田宏「エッセーの書き方」）

天気予報や経済予測などに限定して推量の「でしょう」を導入するということも考えられるが，こうした言い切りが可能な文脈は話し手が「専門家」であるといった特殊な状況（通常学習者が立つことがない立場）における発話であり，それを概言一般に過剰般化（overgeneralization）すると誤用が生じる以上，そうした導入の仕方をすべきではない

と考える[14]。「推量の「でしょう」」は使用上の制約を含めて上級で導入することになる。

以上をまとめると次のようになる。

表3　望ましい導入の順序

(19)

	初級	中級	上級
と思います	○		
でしょうか	○		
だろうと思います	×	○	
でしょう（確認）	×	○	
だろう（推量）	×	○	
でしょうね	×	○	
でしょう（推量）	×	×	○

7．まとめ

本稿では日本語教育文法という観点から「推量の「でしょう」」の扱い方について論じた。日本語学的観点からは「推量の「でしょう」」は基本的な形式と見なされるため，実際の使用数の少なさ，用法の特殊さにも関わらず初級教科書で取り上げられてきていると考えられるが，文法を初級だけで片付けるべきではない，また，体系よりも実際の使用状況を重視するという日本語教育文法的立場からすればこうした考え方は不適切であると言わざるを得ない。本稿ではそうした考え方の対案として論者の立場からした「推量の「でしょう」」の関連表現の導入順として(19)を挙げた。

注

(1) 次例のような疑問語と共起する「でしょう」は「でしょうか」の変異形と見なし（cf. 三宅 1993），「でしょうか」の項目に算入した。

（ア）あ，それは，どちらの国でしょう。（女性 2057）

(2) 「でしょ」という短い表記の場合には推量用法と見られるものはなかった。

(3) 「でしょう（だろう）」の確認用法は（イ）のような「命題確認の要求」と（ウ）のような「知識確認の要求」に下位分類される（三宅 1996）が，ここでは「非推量用法」という意味で「確認」用法として一括する。（（イ）（ウ）は三宅（1996）より）

（イ）「この間，好きだって言ってたの，良介のことでしょう？」「うん」

（ウ）「あのね，駅の地下街にね，『テイク』ってブティックがあるでしょ」「うん、ある」（＝あることを知っているでしょ）

(4) 「★」は発話の途中で次の話者の発話が始まった場合の次の話者の発話が始まった時点を，「→」「←」は発話が重なった場合の重なり部分の始まりと終わりをそれぞれ表す。

(5) 「男性」は『男性のことば・職場編』，「女性」は『女性のことば・職場編』の略で、数字はレコード番号である。

(6) これに対し，「と思います」の例文には話題の偏りはない。教科書の例文を挙げる。

＜みんな＞ L.21　・明日は雨が降ると思います。

＜新文化＞ L.13　・この学校の留学生はよく勉強すると思います。

＜学友会＞ L.7　・明日は雨が降ると思います。

＜初歩＞　L.19　・わたしは医者になろうと思っています。

L.28　・よくわかりませんが，あの人も来るだろうと思います。

＜東外大＞L.12　・(わたしは)きのう小林さんはがっこうへ行かなかったとおもいます。

＜ＳＦＪ＞L.11　・漢字はおもしろいと思います。

(7) 「でしょうね」には(10)(11)のようなものの他に「でしょう」と「ね」が合一して独立のモダリティ形式となったものがある（cf. 宮崎 2005）。今回のデータでは（エ）のようなものがこれに当たると見られるが，この用法の例は「でしょうね」全体の 39 例中 2 例だけであった（その他の「でしょうね」は推量用法と見られる）。

（エ）A：はい，ですから，あの電気でゆうと時期別ー時間別ー，ま季節別はガスないですけれども，時間帯別ですか↑それが明確になれば，えー安い時間帯の分，が，結局下がるってゆうことですね。

B：うんうん。

A：安い時間帯の分をどれぐらい使っているか。

B：これより増えることはないでしょうね＜笑い＞。

A：これより，増えることはないです。(男性 3274)

(8) 安達（1997）はこれと同様の説明を田窪・金水（1996）の「ね」に関する説明を援用して行っている。

(9) 天気予報における「でしょう」の使用動機が気象予報士がデータに基づいて話していることにあるという指摘が姫野（1999:16）にある。これは，こうした言い切りの「でしょう」の使用要因が「専門家」としての発話であることを示すことにあるという本稿の指摘の一部となるものと見なせる。

(10) 「でしょうか」で尋ねられた場合，それに対する答えの文では「でしょう」で言い切れることが多いように思われる。

(11) 聞き手が一定の資格を持っている場合には「でしょう」で言い切ることができるというのは安達（1997）が挙げる次のような場合についても言えることである。

（オ）A「借金の返済、もうしばらく待ってもらえないでしょうか」

B「いいでしょう。月末までなら待ちます」(安達 1997)

(12) 今回参照した教科書の指導書（及び文法説明）の中で「でしょう」の言い切りに課せられるこうした制約について触れているものはなかった。

(13) 注 10 で見たように，「でしょうか」の質問文には「でしょう」で答えても問題は生じないと考えられるので「でしょうか」を初級で導入しても問題はないと言える。

(14) 初級にも上述のような理解レベルと産出レベルの区別を設け，推量の「でしょう」を理解レベルのものとして導入するということも考えられるが，例えば，言い切りの「でしょう」の代表例である天気予報で言えば，重要な情報は「でしょう」に前接する部分なので、「でしょう」が聞き取れないと困るということはほとんどない。従って，理解レベルとしても「でしょう」を初級で導入する必要はないと考えられる。

謝辞

本稿は第 101 回関東日本語談話会（学習院大学）における発表内容に基づいている。同発表に際しコメントをいただいた方々に感謝申し上げる。また，改稿に際し査読者から貴重な

コメントをいただいた。あわせて心からの感謝を表したい。

参考文献

(1) 安達太郎（1997）「「だろう」の伝達的な側面」『日本語教育』95，85-96

(2) 庵　功雄（2005）「文法研究と日本語教育」松岡弘・五味政信編『開かれた日本語教育の扉』，100-108，スリーエーネットワーク

(3) 庵　功雄（2006）「教育文法の観点から見た日本語能力試験」土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会編『日本語の教育から研究へ』，61-70，くろしお出版

(4) 庵　功雄（2009）「地域日本語教育と日本語教育文法」『人文・自然研究』3，126-141，一橋大学

(5) 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

(6) 現代日本語研究会編（2002）『男性のことば・職場編』ひつじ書房

(7) 白川博之（2005）「日本語学的文法から独立した日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』，43-62，くろしお出版

(8) 田窪行則・金水　敏（1996）「複数の心的領域による談話管理」坂原茂編（2000）『認知言語学の発展』に再録，251-280，ひつじ書房

(9) 田部井圭子（1990）「談話における「だろう」構文」『亜細亜大学教養部紀要』41，103-118，亜細亜大学

(10) 野田尚史（2005）「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』，1-20，くろしお出版

(11) 林　四郎（1960）『基本文型の研究』明治図書

(12) 姫野伴子（1999）「でしょう（推量）」新屋映子・姫野伴子・守屋三千代『日本語教科書の落とし穴』，12-19，アルク

(13) 三宅知宏（1993）「派生的意味について」『日本語教育』79，64-75

(14) 三宅知宏（1996）「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89，111-122

(15) 宮崎和人（2005）『現代日本語の疑問表現』ひつじ書房

調査対象の教科書（（）内は本稿での略号）

「みんなの日本語初級」（<みんな>）スリーエーネットワーク編

「進学する人のための日本語初級」（<学友会>）国際学友会日本語学校編

「日本語初歩」（<初歩>）国際交流基金日本語国際センター編

「新文化初級日本語」（<新文化>）文化外国語専門学校編

「初級日本語」（<東外大>）東京外国語大学留学生日本語教育センター編著

Situational Functional Japanese.（<SFJ>）Tsukuba Language Group

（一橋大学留学生センター）